

京都大学西部課外活動施設建設にともなう発掘調査 説明会資料

平成 20 年 4 月 11 日（金） 京都大学文化財総合研究センター

遺跡名：吉田泉殿町遺跡

所在地：京都市左京区吉田泉殿町（図1）

調査面積：約 920 m²

調査期間：平成 20 年 1 月 8 日～

現在調査は、基盤となっている砂礫層上面までの掘り下げをほぼ終了した段階です（図2）。

これまで判明している主要な中世（鎌倉・室町時代）の遺構は、石敷き遺構と掘り込み地業をともなった建物跡、溝、井戸、土器溜め、瓦溜め、柱穴多数、などがあり、土師器や瓦類を中心に多数の遺物が出土しています（図3）。

調査区東南部で見つかった石敷き・掘り込み地業をともなう建物跡について 石敷きの幅は 1.4m、うち 0.9mが石畳状の部分。西に振れる方位で東西方向に 8 mあまりを検出。この南側の落ち込みを掘り下げた結果、大量の礫の埋積が見つかり、「掘り込み地業」と呼ばれる地盤強化の遺構と認めるに至りました。上部に礎石を据え重い柱を載せるため、軟弱な地盤に礫を埋めて強度を高める土木工事です（図4）。したがって石敷き遺構は、建物の北辺を化粧する石畳と雨落ち溝であり、ここにひとつの豪華な建物が存在していたことが明らかとなりました。雨落ち溝は西側で南へ折れて調査区外へと続いているため、建物の北西角部分が調査範囲内に現れている、ということになります。石敷きの無い部分は、後世の削平や流失と考えられます。建物の時期は、出土した土師器の年代観から 13 世紀代になるものとみえています。

このような化粧や土木工事による建造を為し得る人物は、きわめて高位の権力者であったと推察されます。その有力な候補者が、鎌倉時代に権勢を誇った公卿西園寺公経です。遺跡所在地名の「泉殿」は、彼の営んだ池泉を備えた別邸の名に由来しています。こうした由緒と見つかった建物の水準からみて、今回の遺構が泉殿を構成する建造物の一部に相当している可能性は十分考えられます。

ただし、近代以前の字名では調査地は字牛ノ宮に属し、字和泉はさらに北方であること、調査地全体の鎌倉期の遺構・遺物の出土傾向も、建物とは反対側の西～北方へと偏る傾向があること、建物のとる方位が他の中世遺構群と全くずれていることなど、相反するデータもあるため、結論を下すにはさらに検証が必要といえます。

これまで、京都大学吉田キャンパス一帯の中世遺跡の調査では、ごく一般的で簡素な遺構と遺物の出土がほとんどで、邸宅の存在は文献史料の記載から想像するのみでした。今回の発見は、高位の人物の活動と高い水準の建造物の存在をはじめて具体的に示すものであって、京都大学の位置する鴨東地域のみならず、中世京都の歴史を復元していくうえでも、きわめて大きな意義を持つといえます。学術資料として精密な記録を残していくとともに、大学や地域の財産として、今回の成果を有意義に活用していくことが、これからの課題となっていくでしょう。

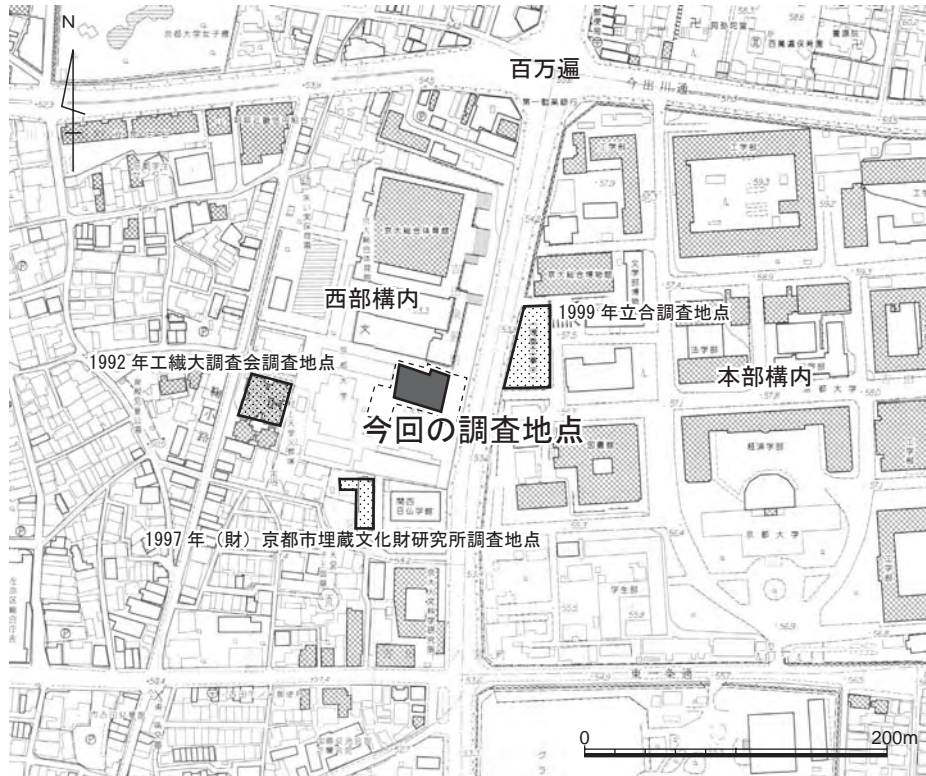


図1 調査地点の位置（縮尺 1/5000）

西園寺公経

鎌倉中期の公卿。内大臣実宗の子。母は権中納言藤原基家の女。源頼朝の妹婿一条能保の女をめとり、娘を九条道家(兼実の孫)の妻とし、幕府や摂関家と深い関係をもった。後鳥羽上皇にも信任されたが、1217年(建保5)大将の職を望んで果さず、不満の意を放言して上皇に籠居を命ぜられ、將軍源実朝の抗議で許された。この後、上皇は実朝・公経への不信を強めた。19年(承久1)実朝の死後、公経の奔走で、道家の子の頼経が鎌倉に下ったが、上皇は討幕の決意を強めた。21年、上皇が討幕の兵を挙げると(承久の乱)、公経はこれを鎌倉に急報し、上皇に一時幽閉された。乱後は幕府の信頼を背に、太政大臣にまで昇り、関白道家・將軍頼経との関係に加え、孫の姞子を後嵯峨天皇の中宮とし、所生の久仁親王(のちの後深草天皇)を皇太子とするなど権勢を極め、また北山山荘(のち、足利氏の手に入り、そこに鹿苑寺、金閣が造営された)を営むなど、豪華な生活を送った。→承久の乱 (参) 竜崎：鎌倉時代 下(1957)、上横手雅敬：西園寺公経(歴史と人物 昭和49年12月号) (上横手雅敬)

新編日本史辞典 東京創元社 1990

- 15 〔明月記〕嘉禄三年六月三十日 申の時許、(宰脱カ)相(藤原為家)来たる。京畿殊に聞く事なし。相門(西園寺公経)、吉田泉を造営し、已に功を成し寄すと云々。
- 16 〔明月記〕嘉禄三年七月十二日 昨日、相門吉田泉を造改なされ、移徙(白)すと云々。
- 17 〔百練抄〕建長七年六月五日 (後嵯峨)、吉田泉殿に御幸す。殿上人・御隨身等、五番競馬ありと云々。
- 18 〔帝王編年記〕文永二年六月四日 吉田泉に於て、公卿・殿上人・御隨身、七番競馬あり。一院・新院、御幸す。
- 19 〔山城名勝志〕^{卷十} 鴨川の東、昔吉田社西北に泉殿と号する田地あり、水石跡残り。⁽¹⁾

(1) 現在も吉田泉殿町として名残りをとどめている。

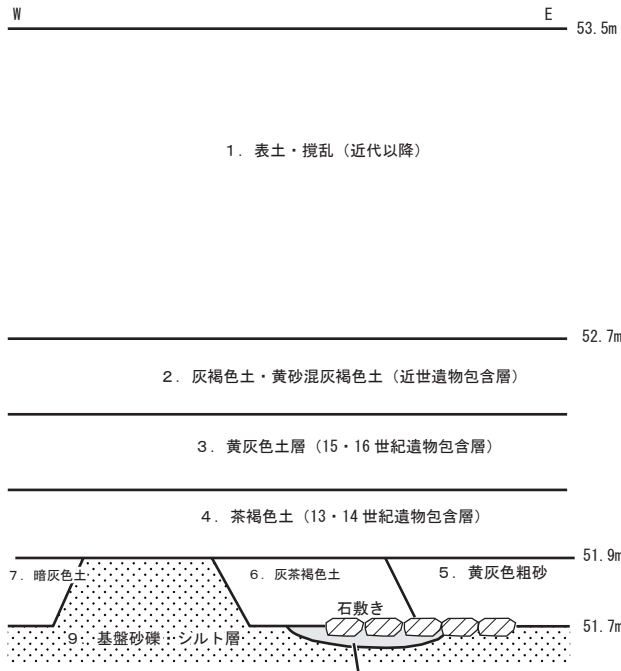


図2 調査区の基本層序模式図

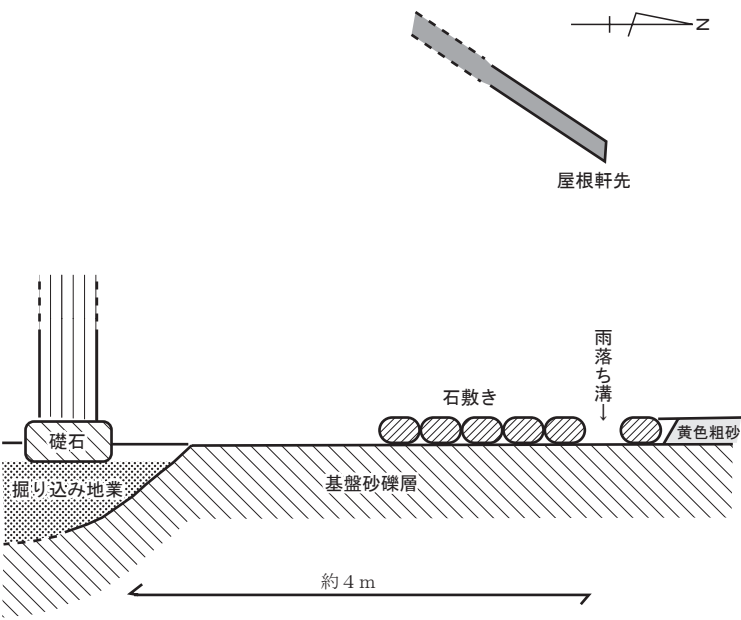


図4 掘り込み地業と石敷きをもつ建物遺構の横断面復元想定図

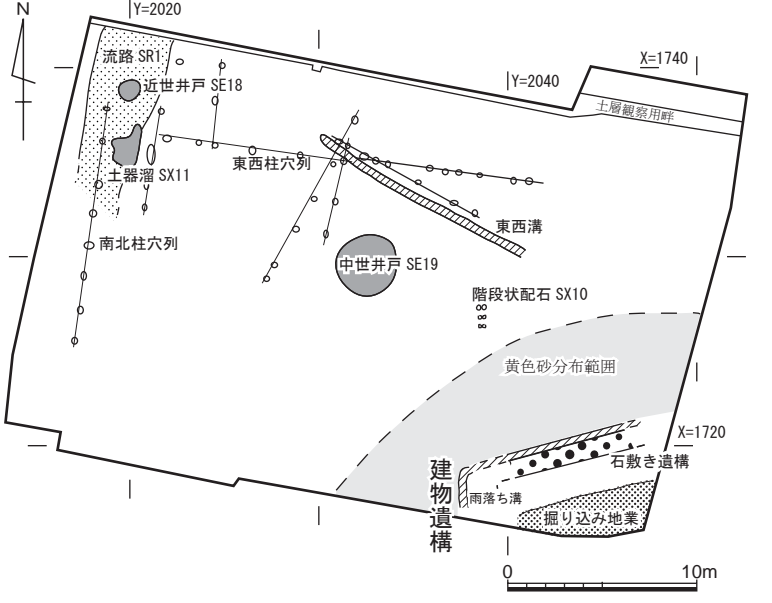


図3 おもな遺構の配置（特に注記しないものはすべて中世：縮尺 1/400）



図5 検出作業中の石敷きと掘り込み地業（東から）